

『みやぎ知的障害者施設解体宣言』に思う

社会福祉法人鞍手ゆたか福祉会 スタッフ一同

◇『みやぎ知的障害者施設解体宣言』全文

◇はじめに

◇『解体宣言』に対するスタッフの感想・意見

- 1 利用者の表情・目の輝きを見れば、施設の居心地がわかる
- 2 地域で暮らすことには賛成だが、入所施設は必要では？
- 3 障害者と地域の人とが接する機会がもっと必要
- 4 もし施設を解体するのであれば、様々な変革が必要
- 5 解体のためには、地域住民の理解を得ることが必要
- 6 障害者問題に対する行政の積極的な対応を望む
- 7 施設入所者や家族に不安や戸惑いではなく、安心や見通しを与えるべき
- 8 地域生活移行のためには、安心できる環境整備が大事
- 9 障害者が地域で暮らしてこそ理解が生まれる
- 10 「解体宣言」は素晴らしいが、地域に出るにあたっての3つの疑問
- 11 人間同士の関わりである以上、人間同士の理解は不可欠
- 12 外出の機会を増やし、地域に慣れさせる取り組みが必要
- 13 物的整備のみならず、何よりも地域住民の心の整備も必要
- 14 町全体で「障害者にやさしい鞍手町」のようなスローガンを掲げ取り組んでは？
- 15 まずは行政に利用者を知ってもらうことも大切ではないか
- 16 一人ひとりをトータルに把握でき、サービスをマネジメントできる機関も必要
- 17 日々、幸福追求の気持ちを持ち続けることこそ、私たち福祉従事者の職務
- 18 自分たちでできることは自分たちで行うことを基本としたマナーの習得を！
- 19 場合によっては施設から離れた代償の方が大きく不幸になるケースも
- 20 1万円以下の給与と年金では地域生活は困難。利用者の給料のアップが先決！
- 21 自治体を動かし、地域生活のための社会資源整備と地域の理解促進が急務
- 22 いろいろな批判を恐れず、施設の外に出て行くこと
- 23 今後の施設の役割は、『自立訓練の場』、『支援センター』、『地域とのパイプ役』
- 24 まずは利用者自身の願いがどこにあるのかを知ること
- 25 障害者が正しく理解されるよう、事業者や国、地方自治体は地域に一層の働きかけを
- 26 サンガーデン鞍手が現場から変えていくノーマライゼーションの先駆者として
- 27 結果を焦らず、本人、家族、地域の人とたくさんコミュニケーションを取りながら

みやぎ知的障害者施設解体宣言

宮城県内にある知的障害者の入所施設を解体して、知的障害者が地域の中で生活できるための条件を整備することを宮城県の障害者施策の方向とすることを、ここに宣言する。

宮城県福祉事業団は、平成14年11月23日、船形コロニーを2010年までに解体し、入所者全員を地域生活に移行させるといふ、「施設解体みやぎ宣言」を発した。宣言を発するに至った背景としては、知的障害者本人の希望と関わりなく、施設入所を当然のこととしてきたのではないかという疑問があった。施設運営に関わる職員としては、自分たちの仕事の意義に対する、真剣な反省である。

この疑問、反省は、船形コロニーだけにあてはまるものではない。船形コロニーは知的障害者の中でも、特に重度の障害を持つ人たちを処遇する場として特別に設置されたものであるから、地域生活への移行を言うならば、県内の入所施設の中では、順番としては一番最後になってもおかしくない位置付けである。にもかかわらず、施設解体宣言を発したということの重みを、十分に考える必要がある。

知的障害を持った人たちの幸福を実現することこそが、障害福祉の仕事の目的であるという原点に戻って考えたい。地域の中にこそ普通の生活がある。適切な支援措置さえあれば、重度の障害を持った人たちがあっても地域での生活を送ることができること、そして、それが知的障害者の生活を豊かなものにするには、これまでの多くの実践の中で実証されている。

船形コロニーの解体宣言から1年余経った今こそ、宮城県全体として、船形コロニー解体宣言の普遍化をなすべき時である。つまり、知的障害者の入所施設を解体し、入所者の地域生活への移行を図ることを、宮城県全体の障害福祉の方向として、明確に示す必要がある。それが、今、このような宣言を発する理由である。

宣言の背景には、これまでの障害福祉施策への真剣な反省がある。知的障害者への各種の施策が量的にも、質的にも貧しかった頃、知的障害者施策の中心は、施設入所であった。「親亡き後」の知的障害者の生活をどうやって保証し、年老いていく親に安心感を与えるかが大きな関心事であったとも言える。施設入所は、こういった環境の下で、頼りになる施策に思えたのは、ある意味で当然である。

入所施設での処遇に比べれば、地域生活支援施策は、歴史的にも浅いものであり、目に見えるインパクトとしても施設のように目立たない。一握りの先進的な取組みとして存在し、特に、親達から見えないし、見えたとしても頼りにならないものと認識されていた時代が長く続いている。一方において、入所施設は、多くの職員と関係者を抱える確固たる存在として、永久に存続するものとして受け止められている。「解体」という発想は、普通は出てくるものではない。

そういった状況の中で、知的障害者本人の幸せとは何かが真剣に問われることがないままに、障害福祉の仕事は成り立っていた。「あなたは、どこに住みたいのか」、「あなたは、誰と暮らしたいのか」、「そもそも、あなたは、何をしたいのか」という問い自体が発せられないまま、入所施設に入っているのが一番幸せと、外部から決めつけられる存在としての知的障害者という図式である。障害福祉の仕事は、知的障害者の幸せを最大にすることを目的とするという見地からは、障害者に対して、まず、この問いが発せられなければならない。そして、その答を模索することが求められる。

知的に障害を持っていることによって、特別なニーズが生じる。特別なニーズがあつたとしても、知的障害者が普通の生活を送ることを断念する理由にはならない。障害福祉の仕事は、その特別なニーズ

にどう応えていくかということである。普通の生活は施設の中にはない。地域にしかない。であるとすれば、地域の中で、知的障害ゆえに発生する特別なニーズに応えていくことこそが、障害福祉の仕事である。グループホームがある。日常生活の援助がある。金銭管理、人権擁護、就労の確保などなど、やるべきことはたくさんある。

宮城県での知的障害者への福祉が目指すべきは、この方向である。「施設解体」を宣言しても、解体することに目的があるのではない。あくまでも、知的障害を持った人たちが、普通の生活を送れるような条件整備をすることに主眼がある。そのような条件整備がなされれば、入所施設は不要になる、つまり解体できるということになる。宮城県の障害福祉のありようとして、こういった方向に進んでいくことを少しでも早めるように各種施策を準備するという宣言でもある。

宮城県内の知的障害者の入所施設を、即刻解体すべしと言おうとしているのではない。時間はかかっても、目指すべきは施設解体、まずは、それが可能になるための、地域生活支援の施策の充実である。県内のそれぞれの入所施設において、このことを念頭に置いて仕事をするのと、全く考えずに日々を過ごすのとでは、大きな違いが出てくる。それぞれの施設において、解体が可能になるまでにやるべきことは何か、何が障害になるのか、障害をなくすための方策、こういったことを現場の職員を交えて真剣に討議し、行動することが求められる。

繰り返して言う。障害福祉の目的は、障害者が普通の生活を送れるようにすることである。そのために、今、それぞれの立場で何をなすべきか。たどり着くべき島影をしっかりと視野に入れて、船の進むべき方向は間違わないように荒波を乗り越えつつ進んでいかなければならない。たとえ時間はかかっても、必ず目指す島に到達することはできると信じている。同じ船と一緒に乗り込んで欲しい。

平成16年 2月21日

宮城県知事 浅野 史郎

◇はじめに

去る2月21日、宮城県知事浅野史郎氏が、『みやぎ知的障害者施設解体宣言』を公表しました。施設関係者にとっては「ノーマライゼーション理念に基づいた、箱物施設主導型から地域生活主導型への時代の流れ」という周知の事実の確認として受けとめられていたようですが、施設入所者の家族には、「解体」という言葉の響きも相まってかなり強烈なインパクトでとらえられ、「我が子は施設を追い出されるのか」「地域は重度障害者を本当に受け入れてくれるのか」などと、批判的な意見が相次いでおり、賛否両論が渦巻いているようです。そこで、当法人では、この『宣言』を題材として、今後の障害者福祉の方向性を如何に展望すべきか、また当福祉会がどのような方向に歩んでいくべきかを、各スタッフに考えていただきました。この文書は、『宣言』に対する各スタッフの意見・感想です。

スタッフの意見の傾向としては、施設生活から地域生活への移行という方向性については、概ね歓迎の意見です。しかしながら、施設で暮らすか、地域で暮らすか、地域で暮らすとしても、グループホームで暮らすか、一人暮らしをするかなど、暮らし方の選択肢を選ぶのは、当事者自身であり、行政や福祉従事者が一方的に決めるのはいかがなものかとの意見も聞かれました。また、それらの選択肢を当事者が選択するにしても、ほとんどの入居者が家庭か施設でしか生活経験を持たない状況の中では、選択すること自体も困難で

あり、様々な暮らしの場を体験することも重要ではないかとの意見が出されました。一方、施設から地域へ移行する過程として、多くのスタッフは、地域の受け皿作り、とりわけ、在宅サービスの充実と地域住民の障害者への理解が不可欠だと考えています。地域の中にサービス基盤が十分に整備されていない中で、障害者を地域に出すことは、ある意味、無謀であるとの意見が多くを占めました。

そこで、将来的に施設入居者の地域生活を見通したとき、施設としては、できる限り多く地域住民とのふれあいの場を作っていくことが重要であること、また、県や市町村自治体も、障害者の地域生活支援のための施策作りや、地域住民への障害者理解の啓発活動などに積極的に取り組んでほしいとの要望が出されました。また、入所更生施設の今後の役割として、行動障害のある人の障害を軽減したり、地域での自立生活に向けての自活訓練の場を提供するなどの意義は大きく、たとえ入居者の終の棲家としての機能は解体しても、施設の持つ専門的機能は地域の福祉資源として大切であり、解体すべきではないとの意見も見られました。

さて、国は、平成15年度をもって、原則として、知的障害者の入所更生施設の新設や増設を行わないとの方針を打ち出しています。しかしながら、自閉症や行動障害を持つ人たちや、疾病等を持ち常時看護を要する人たちは、今後も毎年、養護学校を卒業してきます。すぐには地域の中で生活することが困難な重度の人たちにとって、当面の卒業後の行き先は入所施設しかありません。したがって、今後は、サンガーデン鞍手を含む既存の入所更生施設は、社会的要請として、否応なく、地域生活が可能と思われる入居者から、順次、地域へ移行させて行き、新たな福祉ニーズの受け皿としての役割を負わされることになるでしょう。

とはいえ、重度・最重度の人たちが、地域のグループホームで暮らすことは本当に可能なのでしょうか。ちなみに、現在の知的障害者グループホームの支援費と知的障害者入所更生施設の支援費の金額を比較すると、7人規模のグループホームで、入居者全員が重度者の場合、支援費は年額867万円です。一方、入所更生施設では、重度者7人に対する支援費は年額2719万円です。(平成16年度支援費単価で試算)

このように、現行の支援費制度の下では、グループホームは、入所施設の3分の1の収入で運営していかなければならないという現状があります。社会福祉事業においては、運営費の大半が職員人件費であることを考えると、単純にグループホームでは、入所更生施設の3分の1の人員配置しかできないという結果になります。行動障害やパニックがある方、常時医療的看護・見守りの必要な方、身辺処理に全面介助が必要な方など、マンツーマン、又はそれに近いスタッフの支援を要する方のグループホーム生活が、一向に進まない現状は、正に、この支援費の金額設定よところが大きいと思います。全国でも先進的な自治体では、条例により、グループホームに独自の重度加算制度を設け、補助金を上乘せしているところもあります。そういった自治体では、実際に多くの重度、最重度の方たちが、地域の中のグループホームで豊かな暮らしをしています。したがって、今後、国が重度・最重度障害者を含め、施設福祉から地域福祉に軸足をシフトしていこうとするのであれば、国は、グループホームの支援費単価を、入所更生施設の単価とまでは行かないまでも、少なくとも現状の倍額以上に改めるなどの大幅な改善をしていかなければならないと思います。

また、そのために、私たち福祉関係者が、現場から声を上げ、制度の改善に向けて働きかけていくと共に、自治体独自のグループホームへの重度加算制度などの法制化の運動が、とても大切になってくると思います。

サンガーデン鞍手では、欧米福祉の流れ、日本の障害者福祉の方向性、施策の動向、施設に対する社会的要請(役割)等の諸情勢を見据えながら、基本的には、施設入所当事者のニーズを最優先し、今後の方向性を明確にしていきたいと考えています。

平成16年3月11日

鞍手ゆたか福祉会 総合施設長(当時) 長谷川 正人

◇『解体宣言』に対するスタッフの感想・意見

1 利用者の表情・目の輝きを見れば、施設の居心地がわかる

「障害者を地域に帰す」、「障害者が普通の生活を送れるようにする」。それは、確かにそうだと思います。私が病院で実習をしたときも、わずか2、3週間という期間でしたが、何十年も病院の中で生活していて、お札が変わったのも知らない人や、親が亡くなったことも知らないまま病院で生活している方を見て、いかに障害者が隔離されているかを学びました。

何十年も地域から隔離されている方には、地域で生活したいと強く望んでいる方や、今さら地域に出されても、今の病院の方が居心地がいい方など、いろいろなニーズがあると思います。

地域から隔離されている施設をなくしていこうとする宮城の施設解体宣言はすごい反響です。新しい試みをするとは必ず反発が出ます。この施設解体宣言も、詳しい具体的な内容までは触れられていませんが、最も大切なことは、長い期間で見て、障害者の顔の表情、目の輝きが施設に入っていたときと比べてどうかということです。今は、若い障害を持っている方が成人になったときに、重度であろうが、軽度であろうが、選択肢が多くあるような、そんな方向性になればいいと思います。

では、私の働いている入所施設、サンガーデン鞍手は、どうなのでしょう。サンガーデン鞍手は、入所施設ではありますが、地域に根を下ろしている施設です。昨年ゆたかサンフェスタを見ても、地域の方の太鼓の演奏に利用者の方が飛び入り参加して、一緒に太鼓を叩いている一体感、それを周りで見ている方の温かな目線や表情に、見ていた私は、何とも言えない幸せな気持ちになりました。入所施設に閉じこめるのではなく、地域に目を向けている入所施設は、利用されている方の表情、目の輝きを見ればわかるはずです。サンガーデン鞍手も、地域に目を向けた入所施設でありたいと思います。

2 地域で暮らすことには賛成だが、入所施設は必要では？

知的障害者が普通の生活を送れるようになるためには、地域の人たちの協力が必要だと思います。なかなか難しいとは思いますが、将来は、知的障害の人たちが地域の中で生活できるようになればよいと思います。

しかし、入所施設が不要になるというのはどうでしょうか。入所施設では、障害者同士の集団生活の中で学び取ることもあるでしょうし、いきなり、重度の方が地域生活に入るというのも簡単ではないと思います。私たち支援する者にとっては、知的障害者が地域での生活を送ることが一番良いことだと思いますが、入所施設が解体され、不要になるかどうかは疑問を感じます。

障害者が地域で暮らすためには、まずは、地域の人たちが障害者を受け入れ、理解すること、グループホーム等での日常生活の援助、金銭管理、人権擁護、就労の確保等の準備が必要となってきます。

一方、入所者の家族にとっては、重度の障害を持つ人を、地域が本当に受け入れてくれるかどうか不安があると思います。私たち支援員においても、地域で普通の生活を送ってほしいと思いつつも、同様の不安は禁じ得ません。この問題は、これからも、全国の入所施設が考えていかなければならないことであると思います。

3 障害者と地域の人とが接する機会がもっと必要

私は、障害者が地域に入り、生活していくために最も必要なことは、地域の人たちに障害者について知ってもらい、理解してもらうことだと考えます。

そのためには、障害を持った人たちと地域の人たちが、お互いに接する機会がもっと必要であると考えます。地域の人たちは、障害者に対し、偏見があると思います。私の友人にも偏見を持っている人がいます。その理由は、「汚い」、「怖い」というような外見での判断です。しかし、私は、それも仕方ないことだと考えます。私も、接してみて理解したことが多くあるので、接する機会がなければ外見で判断するしかないのだと思います。

しかし、すでに偏見を持っている人たちは、自ら障害者に接するというのを好まないのではないかと思います。したがって、もっと障害者の方から、歩み寄れる機会が必要であると思います。また、小さい頃から接する機会があればよいと思います。

4 もし施設を解体するのであれば、様々な変革が必要

施設解体宣言の一文に、「(障害者が地域生活を営む上での) 障害をなくすための方策が求められる」とありました。

私は、利用者と共に生き、支え合うことで信頼関係が生まれ、その中で彼らの姿が見えてくると 생각합니다。私たち支援員の責務は、彼らが自らの力で成長していくことを支援することにあると思います。そして、その支援の主体は、利用者側にあり、私たち支援員ではありません。利用者のできないこと、苦手なことばかりに目を向け、それをなくすというような治療的なやり方は、支援員側の期待であり、利用者が必ずしも望むものではありません。

そういったことから、もし施設解体をするのであれば、支援内容のあり方、支援員の配置、設備の充実、連携機関の充実、そしてこれらを制度として確立していくための法整備などの変革が求められると思います。

知事は、宣言したからには「有言実行」していただきたいと思います。私も否定的な意見ばかり書きましたが、施設解体へ動き始めていくことには賛成できます。

5 解体のためには、地域住民の理解を得ることが必要

私は最初、この解体という言葉を知り、どういうことなのか正直驚きました。しかし、文章を読んで、もしこの計画が実現されれば、本当に素晴らしいことだと思いました。しかし、これを実現させるためには、数々の問題点を全て乗り越えることが絶対条件であると思います。中でも、地域住民の理解を得ることがとても大切なことだと私は思います。メールマガジンの視聴者の意見で、「行動は制限されるべき」、「狂獣を放し飼いにするつもりか」、「気分が悪い」等の信じられない表現を見て、それを切々と感じました。もっと地域で話し合いの場を設けて、知的障害者の方たちに対する正しい知識を持つことが彼らが地域で安心して生活できるようになる最も大切なことだと思っています。

6 障害者問題に対する行政の積極的な対応を望む

「解体」。新聞紙上の見出しだけを見ると、家族、親たちには、本当に入所施設がなくなるのかと思われても仕方がないような宣言に聞こえます。これから本当にどうなるのでしょうか。

おそらくこの宣言は、施設においてしばしば問題となる「隔離」、「虐待」、「人権無視」など、明らかにノ

ーマライゼーションに逆行しているような、施設の実態をふまえての内容なのではないでしょうか。すなわち、社会福祉基礎構造改革の流れの中で、福祉は、地域生活主導型へと移行していく方向を目指しているにもかかわらず、福祉現場、とりわけ施設において、それが決して十分に進められているとはいえない状況に対する警鐘であるともとらえられます。

私たち施設職員の役割は、利用者主体の質の高いサービスの提供を目指すと共に、利用者の人たちが、あたりまえの暮らしを目指して生活できるように支援していくことだと思います。

かつては、病で亡くなってしまっていた障害を持った子どもたちも、医学の進歩により今日では、長く生きられるようになりました。そういった点から考えると、今後益々障害を持った人たちも増加してくるのではないかと思います。それを思うと、国・県行政は、障害者問題に対してより積極的に対応していただきたいと思います。また、障害者問題を他人事としてとらえるのではなく、自分の身内だったらという気持ちで対応していただきたいと思います。

これらのことは、行政にとっても、福祉現場にとっても、今後の重要な課題だと思います。

7 施設入所者や家族に不安や戸惑いではなく、安心や見通しを与えるべき

私が、「みやぎ知的障害者施設解体宣言」を知ったのは、朝日新聞の朝刊でした。その時は、特に何も思わず、「これからの福祉は、当然こうなるべきだろうな」というくらいでした。そして数日後、テレビの『ニュースステーション』で「解体宣言」の特集を観ました。その中で、障害者の家族の方々の不安や戸惑いの大きさが切実に伝わってきました。このことは、私にとって、かなり強烈なインパクトとなりました。私たち施設関係者も行政も、家族に不安や心配を与えるようなことは決して良いことではなく、逆に、入所施設に入っている人や家族に安心や見通しを与えるべきだと思います。地域への移行における問題や課題はたくさん存在していると思いますが、サンガーデン鞍手のような施設が、グループホームへの通過点だと思えば、きっと家族の方も安心するのではないかと思います。

私も施設職員として、障害者が普通の生活を送るために、サンガーデンでの仕事を通して、いろいろな体験を提供し地域生活へ移行できるよう努力していきたいと思います。

8 地域生活移行のためには、安心できる環境整備が大事

私は、この「みやぎ知的障害者施設解体宣言」のことについて、施設から地域へ障害者の方たちが出て行くことは、とてもよいことだと感じました。実際に、ゆたかの里から就職し、地域社会へ旅立ち、充実した生活を送っている方たちもおられます。知事の文書にもありましたが、「障害者が普通の生活を送れるようにする」ことは、私もそうであるべきだと思います。

将来、障害者の方も安心して生活できる社会であってほしいと思います。そのためには、サンガーデンのような施設、グループホームがたくさんでき、障害者の様々なニーズに応えられるようになればいいと思います。また、私たち福祉スタッフも、何をすべきか、どのような支援が必要かを重々考えながら行動していくことが大切だと思います。

障害者が普通の生活を送れるようになるためには、まだまだ時間がかかるかもしれません。そのために乗り越えなければならない様々な問題もあります。しかし、宮城県のように、県をあげてこのような障害者の施策を行うことは素晴らしいと思います。障害者福祉が横浜市のように進んでいるところもあれば、そうでない地域もあり、福岡県も早く宮城県のように施設福祉から地域福祉への移行を目指す取り組みがなされる

日が来てほしいと思います。

「解体」という言葉に、保護者からは、批判的な声も多数上がっているようですが、私も、やはり「解体」という言葉からは、良い印象は受けません。保護者は、不安も抱えると思います。保護者には、不安や心配を与えないように、安心できる環境整備が大事になると思います。私もスタッフとして、サンガーデンを通して、「普通の生活」に近づけていくために、できることは努力していきたいと思います。

9 障害者が地域で暮らしてこそ理解が生まれる

宮城県が県をあげての施設解体を宣言し、とうとうそういう時代がやってきたかという思いと、すべての施設を解体することは、現実問題、無理ではないだろうかという思いが駆けめぐりました。

本来、障害者が地域で暮らすことは、あたりまえであってほしいと思います。しかし、現実としては、障害者が地域で暮らすには、様々な問題があり、ハードルは高いのが現状です。なぜなら、障害者に対する知識や理解があまりにも乏しいからです。たとえば、障害者が人目をはばからず、駅前で放尿し、変態扱いされ、警察に通報されたという話を耳にしたことがあります。もし、その場にいた人が、障害者を知る人たちばかりであれば、どうなっていたでしょうか。警察に通報され、お巡りさんが駆けつけるような事態にはならなかったのではないのでしょうか。

多くの人々は、障害者に対して、怖い、違うなど勝手なイメージと誤解や偏見で覆い尽くされてはいないのでしょうか。彼らは、障害者と接する機会もなければ、地域で暮らしている姿を見ることも少ないのだから、受け入れる態勢ができるはずもありません。なぜ、こんなふうになってしまったのでしょうか。それは、親が施設へ入れるからでしょうか。そうではなく、親は、施設へ入れるしか選択の余地がありませんでした。そういった流れの中で、障害者は地域で暮らすことがなく、施設という閉鎖的な空間へと追いやられ、地域とは無縁な存在となってしまったのです。

日本の社会においては、「みんなと同じであることが善とされ、一人だけ違うと悪」という考え方が長く続いています。そもそも、人間はみな違っており、それがあたりまえであるにもかかわらず、なぜ、障害者というだけで阻害されてしまうのでしょうか。障害者は、確かに自立が難しく、多くの助けを必要とし、時には他人に迷惑をかけることもあります。しかし、だからといって施設で暮らさなければならないという考え方はおかしいのではないのでしょうか。

施設に入る場合においても、それぞれ様々な理由を持っています。しかし、その理由の根底には、地域に安心できるサービスがないに等しいからではないのでしょうか。少なくとも、施設の中では、安全に、衣食住が保障されて生活していくことができます。施設から放り出されれば、危険と背中合わせの世界に身を置くことになってしまいます。障害者が地域で暮らすためには、そこにしっかりとしたサービスやシステムがなければ生きていけないのです。地域住民の知識や理解があれば、かなり住みやすくなりますが、現実はそのような世の中でもありません。障害者が地域で暮らしてこそ理解は生まれます。何より、接しない限り理解は深まりません。地域で暮らすことを安心して選択できるようになれば、それは最高の選択となるでしょう。

今後、宮城県がどのような取り組みをなしていくのか、そのプロセスに期待したいと思います。地域で暮らしていけるような賃金の獲得、住まい、グループホームの運営など、興味深いことはたくさんあります。障害者が普通の生活を送れるようになるためにも、実践できそうなことはどんどん取り入れ、ニーズに応じていかなければならないと思います。

10 「解体宣言」は素晴らしいが、地域に出るにあたっての3つの疑問

施設の中で30年も暮らしている方がいるといいます。その方たちは、外の世界（地域での生活）を知らないまま施設に入り、生涯の大半を施設の中で暮らしてきました。果たして、この先、このままでいいのでしょうか。誰もが疑問に思うことではないでしょうか。

措置の時代には、本人の希望とは関わりなく、施設入所が当然のこととなっていました。しかし今、施設入所中心の施策から、地域生活支援の施策へと変わって来ているといいます。今回の「解体宣言」、私はとても素晴らしいことだと思いました。なぜなら、福祉先進国と言われている国と比べて、日本は随分と遅れをとっています。スウェーデンでは、施設で暮らしている方はほとんどいないといいます。今の日本において、解体宣言がどこまで実現できるのかわかりませんが、宮城の施設解体宣言に続いて、その他の都道府県も、「脱施設」が広がっていけばいいと思います。

「地域」に出るにあたって、疑問点がいくつかあります。

- ①重度の障害を持った人たちが、「地域」に出て生活することができるのでしょうか。
- ②施設職員の「地域」での役割はどうなるのでしょうか。
- ③一人ひとり違うニーズに応じていけるだけの体制が整えられるのでしょうか。

今のところ、私の疑問点は、以上3点です。①については、宣言の文中に、「多くの実践の中で実証されている」とあるので、その実例を知りたいと思いました。

11 人間同士の関わりである以上、人間同士の理解は不可欠

入所施設の解体は、福祉の世界での理想だとは思いますが、果たして解体を行って障害を持つ人たちが行く場所があるのかと問われれば、疑問でもあります。また、地域の人たちの障害を持つ人への理解がどの程度あるのかも考えなければなりません。親が他界したとき、軽度の方ならグループホーム等の対策がありますが、常時支援者の見守りや介助の必要な重度の方はどうなるのでしょうか。

軽度の方も重度の方も生活が保障できる体制が整えば地域への移行を考えていくことができると思います。

しかし、サンガーデンの入居者を見てみると、親の高齢化、もしくは、親の負担の軽減のために入所している人がほとんどです。施設開設後7ヶ月、スタッフも、四苦八苦しなごころまで来ましたが、正直、今の現状で地域への移行と言われても実感が沸きません。これから先、どのような障害を持っていようと、地域で生活していけるだけの福祉的な対策が整ってきたら、全国の都道府県において、施設解体も進んでいくと思います。

そのためにも、まず、地域の人に障害というものの理解を求めなければならないと思います。人間同士の関わりである以上、人間同士の理解は不可欠であると思います。

12 外出の機会を増やし、地域に慣れさせる取り組みが必要

知的障害者が地域で暮らすことは、誰もが望んでいることだと思っています。私は、施設から地域へ送り出される障害者本人の気持ち、保護者の思いなどを第一に考えなくてはいけないと思います。施設がなくなるといことは、やはり保護者にとってとても不安なことだと思いますが、これから先は、障害者が地域で同じように暮らすための訓練として、グループホームが整備されて生活できる場がもっとできないと難しいと思います。

金銭管理の問題や地域に暮らす人たちの理解や障害者が働ける就労の問題などがあり、とても簡単には解

決できない問題を抱えています。現状を考えると、地域に住むにあたって、障害者のことがわかっていたとしても、予期できないことは多々あると思います。それが積もりに積もると、地域の人にとっては嫌なことになり、近寄りたくない関係になっていきます。また、一人では生活できなくて、常時支援が必要な障害を持っている人もいます。保護者の方々は、やっと安心できる施設に入れたのと思っているに違いありません。納得でき、安心できるような条件をわかりやすく説明しなければ、反発は起こると思います。

そのためにも、今、何をしなければならないか支援する立場から考えて、地域にもっとアピールし、知ってもらわなければならないと思います。障害者本人たちも自由に外出はしたいと思っているはずで、すぐに施設をなくすのではなく、徐々に時間をかけて地域に慣れさせるような取り組みをして、普通に生活できるような環境づくりが必要です。

13 物的整備のみならず、何よりも地域住民の心の整備も必要

宮城県の施設解体宣言は、「障害者も地域の中で生活を」という基本理念に基づく宣言であり、『脱施設化』として素晴らしい取り組みだと思われま

す。確かに、現在、入所施設に入って生活している人の中にも、グループホームや一定の支援がなされた場合、十分に地域の中で生活できる人も多々いると思われま

す。現段階で、地域の方に「地域の中で障害を持った人たちが生活することに対してどう思いますか」とアンケートを取ったら、「良いことだと思う」と賛成の答えが返ってくると思います。しかし、実際に、それが現実となると、かなり違ってくるのではないのでしょうか。

地域の中で生活するためには、地域の人たちの受け入れ体制があることが前提条件となります。当施設も、近い将来、『脱施設化』を目指すのであれば、地域住民の障害者に対する理解度や意見、思いを十分に把握し、改善した上での行動が必要ではないのでしょうか。

宮城県も2010年までにコロニー解体と期限を掲げて宣言していますが、先が鮮明に見えないままの行動宣言であったために、障害を持った親たちは、大きな不安を抱えたのではないかと思います。ある程度の準備、地域整備等を整えた上での行動宣言であれば、親たちの意見も変わってくるのではないのでしょうか。

今後は、『脱施設化』を宣言する都道府県も増加すると思われま

すが、地域に出たとき、障害者が安心して暮らすことができるように、条件や体制を整えていただきたいと思

います。物的整備のみならず、何よりも地域住民の心の整備も必要になってくると思

います。

めに、鞍手町全体の取り組みとして、「障害者にやさしい鞍手町」のようなスローガンを掲げて活動していきける体制をつくることで実現可能となるのではないのでしょうか。また、支援する私たちの質の向上を心がけ、私もさらに勉強していきたいと思います。

15 まずは行政に利用者を知ってもらうことも大切ではないか

「みやぎ知的障害者施設解体宣言」について一番に感じたことは、よい方向だとは思いましたが、正直、地域に移行して本当に大丈夫なのだろうかということです。施設で生活するよりも、グループホームなどは自由で生き生きとした生活ができるかもしれません。

しかし、自傷や他害行動などがある方への対応方法や金銭管理等、またそれ以上に地域の理解が得られているのかなど様々な課題が横たわっています。そのようなことを考えると、行政が具体的な案をあげ、環境を整えてからでないといけないのではないかと感じます。でなければ、誰もが安心した生活を送れないのではないのでしょうか。

サンガーデンの生活であれば、開設当初の昨年8月より、現在は行動障害はかなり減ったと思います。地域へ移行する方向性で行くならば、まずは行政に利用者を知ってもらうことも大切ではないかと思えます。現実を知ってもらい、それから環境整備等を進めていただきたいと思えます。

16 一人ひとりをトータルに把握でき、サービスをマネジメントできる機関も必要

知的障害者が「地域で普通に暮らす」ということは、当然のことであると思えますが、普通に暮らすと一言で言っても、その暮らし方は、その人それぞれに合った暮らし方があると思えます。大切なのはその人が幸せに暮らせるかどうかであると思うので、そこからいろいろなことを考えていかなければならないと思えます。どこで誰と住みたいのか、どんな暮らし方をしたいのか、どんな願いを持っているのかをしっかりと理解し、それを実現するために必要な支援の内容についても考えていかなければならないと思えます。

しかし、今の制度では、障害を持った方が、自分で選択して自由に暮らしていくことは、とても困難なことだと思われまます。宮城県の宣言のように、今から条件を整備していけば、普通に地域で暮らしていくことができるようになり、そうなる箱もの施設はいらなくなると思えます。また、そうなっていかねばならないと思えます。

また重度の方たちにとっては、制度や条件を整えるだけでなく、地域の人々に理解を得ることがとても重要なことだと思えますので、これから施設から地域への移行にあたっては、地域の人々と自然にふれあい、お互いに理解しあえる場を作っていかなければならないと思えます。また、施設や家から出て暮らした経験のない人たちがほとんどなので、いろいろな暮らし方を経験でき、自分の暮らしに見通しを持ち、また暮らし方を選択できるようなシステムが必要だと思えます。

さらに、地域に出るといろいろな人たちから支援を受けることになると思えますので、一人ひとりをトータルに把握でき、福祉サービスをマネジメントできる機関も必要になるのではないのでしょうか。

17 日々、幸福追求の気持ちを持ち続けることこそ、私たち福祉従事者の職務

障害者であるから、能力が足りないから、必要最低限の生活（施設での生活や単に寝起きと食事の生活）で済まされるという考えは、昨今の人権問題や民主主義が世界的に叫ばれる風潮の中では、もはや時代遅れ

といわざるを得ません。朝目覚め、仕事に出かけ、余暇時間を楽しむ家族との生活、あるいは、個人の希望に応じた住環境の中での生活、趣味を持つこと等を実現しようと日々努力することこそ、また生活を楽しむことこそが、一般生活であり、自立した生活だと思います。

障害を持つが故に、これらの希望を最初から断つということは、共に生きる生活者、あるいは、人間として耐え難く、またそのような不幸等を容認する社会体制は、決して幸福を追求する福祉社会ではあり得ないと思います。特に、私たち福祉の仕事に携わる従事者や、福祉行政、教育に関わりを持つ者に必要なことは、日々の生活の中で、様々な状況にある人々の可能性や幸福を考え、支えようとする気持ちではないでしょうか。

福祉事業というのは、幸福実現の哲学であり、日々の実践の中から、それを実現していくものであると思います。現実を直視した場合、それが機が熟さず、多くの困難を抱えている場合であっても、日々、幸福追求の気持ちを持ち続けることこそ、私たちの職務ではないかと考えます。

以上、浅野知事の宣言をふまえ、自分なりにその宣言の意味を考察してみました。

18 自分たちでできることは自分たちで行うことを基本としたマナーの習得を！

私はこの「みやぎ知的障害者施設解体宣言」を2月21日（土）読売新聞夕刊にて知ることとなりました。では、いったいいつまでに何をどうしたらいいのか、地域の中で普通に暮らしていくための施策は何なのか、お金はいくらかかるのか、そのお金はどうするのかなど課題は大きく、前途多難と思われれます。

行政のバックアップの可能性が未だ皆無に近い状態であるならば、ヘルパーステーション的存在の法人の責任と資産的負担は大であります。

しかし、一日も早く実現に向けての方向性を問うならば何ができるのでしょうか。地域で障害者を受け入れてもらうための環境や条件の整備はもちろんのこと、人材の育成、地域へのアピール、協力の呼びかけ、不動産業者へのコンタクトなどその他諸々が必要になってきます。また、障害者にも自立に向けての準備が必要になってくるのではないのでしょうか。グループホームでの自活に向けての取り組みも徐々に進めていかななくてはなりません。以前取り組んでいた宿泊体験（ほとんどが一泊のお泊まりの感覚でしたが）なども内容を検討した上で再開が待たれるところです。現在のサンガーデン入居者の生活のようなおまかせスタイルではなく、些細なことでも自分たちでできることは自分たちで行うことを基本として。（言うのは簡単ですが）たとえ、小さな家族単位であっても、生活の中の決まりやルールはあたりまえで、ましてや他人同士の生活となればなおさらのことです。躰でもなく、訓練でもなく、強制でもない、マナーとしての習得は必要なのではないでしょうか。

そして、それは、支援するサポートスタッフにも言えることではないのでしょうか。これから先、支援の幅を拡げるためにも是非料理の腕は磨いていただきたいです。そのときは、グループホームで生活する人たちが美味しい愛情のこもった食事ができるためにも、私も応援していきたいと思います。

現実問題として、実現までどのくらいの時間を要するのか、想像もできませんが、あたりまえのことがあたりまえとして認められる日が一日でも早く、そしてその日が来たときいつでも地域にとけ込めるように支援していきたいと思っています。

19 場合によっては施設から離れた代償の方が大きく不幸になるケースも

宮城県の今回の宣言は、障害者のノーマライゼーションの進行を速めるための勇気ある行動であったと思

います。しかし、この時期に唐突すぎるような感じは受けました。施設解体後、障害者が生活する上で様々な支援マネジメント、それを支える人材、費用の予算化等の青写真ができているのでしょうか。これらが揃えばいつでも可能であることは、重度心身障害者の一人暮らしが現実になされていることから実証できますが、ここで問題にしたいのは、「暮らせる」ではなく、「暮らし様」です。それは、県の整備としては、地域で暮らすためのサービス量（ハード面）を揃えることで完結し、ソフト面は事業者の営業努力に橋渡しすることでしょう。

今の現状を見てみると、重症心身障害者の一人暮らしの場合、国の施策では、衣食住の最低の支援をヘルパー等で補っています。本人が花見を希望しても、旅行を希望しても、国の施策からは漏れていきます。

知的障害者が、施設を離れてグループホームやアパート暮らしを望む背景は、集団の束縛から離れると自分なりの自由な時間が使えるからだと思います。さて、彼らが施設を出て、小グループ、あるいは単独で暮らし始めたとします。住む場所と生活に必要な最小限度の支援者は保障されますが、県は衣食住以外の保障は多種保護法の公平性から見ても認めないと思われまます。施設を離れて、自分の時間がたっぷりでき自由になったれども、支援者をつけてもらえないから自分の思うことができず、自由のない状態になったとしたらどうでしょうか。地域生活には、施設で味わう多くの体験や行動範囲を奪いかねないという可能性も潜んでいます。

在宅支援を考えた場合、不況時代の中で今後どのように公的保障が増減するか、自己資金がどこまで使えるか等、先々の暮らしをファイナンシャルマネジメントした中で将来の暮らしを描いて進めていかないと、施設から離れたのはいいが、お金がなくて身動きが取れないなど、施設から離れた代償の方が大きく、不幸になるケースも考えられます。

宮城県は施設解体の後に必要なものを再生する力を信じていったのでしょうか。宮城において、十数年後、地域に放り出されただけで無味乾燥な生活を送る障害者が生まれないことを、また施設か地域かといったことさえ自己選択できずに強制的に地域に放り出される障害者が生まれないことを期待したいと思います。少なくとも、施設で行っていたサービスは地域に移行しても保障していただきたいと思います。

宮城県が、障害者の真の生活の質を考えずに、ただ施設解体論という改革パフォーマンスに走ったとしたら、その宣言の意義はないと思います。一方、県も大きな痛みをとめない予算を増やす中で、社会や企業、ボランティアなどに社会資源の成熟をうながす働きかけをしていくなれば、宣言は極めて意義深いものとなると思います。

宮城県の施設解体宣言の真の評価は、県としての今後の取り組み如何によると思います。

20 1万円以下の給与と年金では地域生活は困難。利用者の給料のアップが先決！

今回の解体宣言は、マスメディアで多く取り上げられ、賛否両論が問われています。我が子がどのようにして、地域生活へ移行していくのか、障害を持つ子どもの親は、明確なビジョンが見えてこないため、消極的な意見しかあがってこないように思えるし、施設職員においても同じようなことが言えるように感じます。私自身もその一人であるし、この件に関して、賛成とも反対とも言えません。正直よくわかりません。

しかし、サンガーデン鞍手が、「施設解体」を方針として掲げていくなれば、その方針の下に取り組んでいきたいと思います。より良い方向に持って行けるよう努力していきたいと思います。そして、やるならば、「絵に描いた餅」で終わらせてほしくないと思います。右往左往せず、しっかりと舵を取って、思いつきではなく、計画的に進めていただきたいと思います。舵取りが迷えば、現場も迷い、不安になります。そのようなことにはなってほしくないと思います。しかし、行政を巻き込まずに、単体の施設でどこまでやれるのでし

ようか。現実的に厳しいように思えますが、それでも取り組んでいくのでしょうか。そこに大きな疑問が残ります。今後は、その案を聞かせてもらえたらと思います。

それから、地域での就労支援を通して感じたことですが、実際、就労支援は大変です。事業所は、障害者への対応は初めてのところが多く、「どのように接したらいいのかわからない」、「暴れたりしないか」、「不安だ」など、それぞれに口を揃えて事業所は言います。そこに支援者が理解を求めていくことは容易ではありませんが、実際に取り組んでいく姿を見せたり、やらせてみることで、事業所の見方は随分と変わっていきます。要は、障害者を色眼鏡で見ること、偏見を取り除くことが、地域で生活していくための第一歩だと思います。

最後に、私自身、就労支援や研修などを通して感じたことは、私たちがまず取り組んでいかなければならないことは、利用者の給料のアップだということです。1万円以下の給与と年金で、私は生活できる自信はありません。

21 自治体を動かし、地域生活のための社会資源整備と地域の理解促進が急務

入所施設の解体宣言を読んで、まず最初に感じたことは、サンガーデンの利用者（特に重度の人）は、大丈夫なのか、ということです。確かに、施設の中で生活を送るよりは、グループホーム等、地域の中で生活した方が、刺激もあり、行動障害の軽減も図れるかもしれませんが。

ただ、地域生活に移行する上では、多くの課題の克服が必要であると思います。すなわち、障害者にとっての入所施設のあり方の検討、行動障害を持った人たちへの対応方法の検討、就労先の確保、地域の人たちの理解、地域生活を送る際の安全性、地域へ移行した際の職員不足の対策、保護者の考え等です。

今後、サンガーデンを解体し、地域生活に移行するのであれば、まず、自治体を動かし、十分に生活できる社会資源、社会保障、地域の方の理解の促進等の整備が必要ではないかと思います。

22 いろいろな批判を恐れず、施設の外に出て行くこと

支援費制度がスタートしたとき、「脱施設」という言葉がマスコミを通して聞かれました。しかし私は、こういった言葉は建前であって、実際にはかけ声だけに終わるのではないかと感じていました。しかし、ここ最近、「ゆたかの里」所員にも、ガイドヘルプなどの在宅支援サービスを利用する人が増えてきています。休日を有意義に過ごしているといった声が保護者から聞かれます。そして、ここに来て、宮城県で、入所施設の入所者を地域へという宣言。これは、本当に時代が変わりつつあるのだという思いを強くしました。

「脱施設」を本当に実現していくならば、行政のやる気とリーダーシップ、地域の理解等、様々な社会的な基盤づくりが必要になります。

私たち施設職員は、何を心がければよいのでしょうか。それは、いろいろな批判を恐れず、施設の外に出て行くことではないでしょうか。理屈ではなく、行動を起こさなければ、変わらないこともあります。（もちろん、あまり強引になってはいけないと思いますが。）これから一筋縄ではいかないとは思いますが、地道に活動していかなければと思います。

23 今後の施設の役割は、『自立訓練の場』、『支援センター』、『地域とのパイプ役』

「みやぎ知的障害者施設解体宣言」をニュースで聞いたとき、とうとうこの動きが実際のものになってき

たかと思いました。

現在の日本では、知的障害を持った人たちの自立生活支援は、主として軽度の人を対象としており、重度の人たちは、「入所施設しかない」という選択しかありませんでした。また、自立支援は施設が行うことだという認識がなされており、なかなか進まないというのが現状であると思います。

しかし、この「みやぎ知的障害者施設解体宣言」は、障害の重さにかかわらず、知的障害を持った人たちが地域で安全に暮らしていくためのシステムを行政がバックアップし、また主体となって作り上げていくことを宣言しており、重度の人が地域で暮らしていくための基盤作りの第一歩ともいえると思います。

入所施設は、サンガーデン鞍手もそうですが、これからは『生活の場』ではなく、『自立訓練の場』として、知的障害を持った人たちがそれぞれの障害の重さにかかわらず、一人ひとりが可能な範囲の自立のための力を身につける経験の場であり、地域で暮らしている障害を持った人たちの支援センターでもあり、地域社会と地域で暮らす知的障害を持った人たちとのパイプ役（障害者への理解を促し、連携をとっていく）でもあると思います。そして、このような多様な役割を柔軟に、すべて並行しながら果たしていくことが必要であると思います。さらには、障害者自身が可能な範囲で適切な自己決定ができるように支援していくことも、とても重要であると思います。

サンガーデン鞍手は、まだ始まったばかりですが、これからもっと地域社会での生活に目を向けて、今後一人でも多くの利用者が地域で快適に自分らしく、『自分の家』だと思える場所で暮らしていけるように、利用者にたくさんの生活経験をしてもらいたいですし、私も、食生活における支援者の一人としての自覚を持ち、日々の業務に励みたいと思います。

24 まずは利用者自身の願いがどこにあるのかを知ること

「みやぎ知的障害者施設解体宣言」を読んで一番に感じたことは、これから先、私たちがやっていくことはこれなんだということでした。サンガーデンもいずれは地域に利用者の方を返していくことになると思います。

確かに、入所施設での生活には安心感があると思います。しかし、利用者自身ははたしてそれを望んでいるかどうかは疑問です。利用者のニーズを尊重するのであれば、どういうところに利用者自身の願いがあるのかを知ることがとても大切だと思います。

地域生活には良いことも悪いこともあると思いますが、利用者、家族が一番望んでいることではないでしょうか。サンガーデン鞍手を利用して下さっている方は、少しでも地域へと願いを込めて入所されている方々だと思います。

しかし今後、障害者が地域で暮らすためには、様々な地域支援体制の充実が求められます。サンガーデンで生活されている利用者の方々の願いが、一日も早く実現できるといいなと感じています。

25 障害者が正しく理解されるよう、事業者や国、地方自治体は地域に一層の働きかけを

私自身、本当の意味で障害者の方たちが地域社会に帰れたら施設解体はすばらしいものだと思います。施設の中での個人の存在は小さく、また集団の中では規制されることも多く、なにより家族の温もりがなく、24時間その中で過ごしていると、家にいるときのような安堵感がないのではないかと思います。地域の中で自由に暮らすということがすばらしいことだと思うのです。

しかし、福祉に従事する方たちも頑張っていて、障害者の人たちが地域で暮らすことができたとしても、地域

住民が受け入れなくては、障害を持つ方たちの自由はないのではないのでしょうか。

私の身近にあった話ですが、福祉協力校である中学にひとりの知的障害を持つ男子がいて、同級生たちはその男子生徒のことをよくお世話していたそうです。しかし、ある日、いつものように同級生たちと遊んでいたところ、悪ふざけをしすぎて、その男子生徒は、同級生のひとりに怪我を負わせてしまいました。それからは、同級生の数人は、その男子生徒を避けるようになり、同級生の母親も、「いくら障害を持っていてもそれに甘えている。関わらないようにしなさい。」と子どもに言ったそうです。

それを聞いて私は、福祉協力校でさえ、生徒、教員、父兄が障害者のことを理解していないことを痛感しました。

私は、地域において、もっといろいろな障害について勉強することが必要だと思います。また、障害者と健常者が共存するために、障害者が正しく理解されるように、福祉事業者や国、地方自治体は、地域に一層の働きかけや環境作りをするように努力しなければいけないのではないかと思います。

26 サンガーデン鞍手が現場から変えていくノーマライゼーションの先駆者として

先日、担当ではない方のアセスメントシートを見る機会がありました。その中にあった「施設への希望」のところに、「一生施設で面倒を見てほしい」とありました。サンガーデンが通過点ではなく、終の住家としてとらえられていて、その方は、あと何十年もの間ここで暮らすのかと考えると複雑な気持ちになりました。と同時に、これが親の正直な気持ちで、今の現実なのかなと自分の中で消化しきれない何かがありつつも納得していました。

私がそのような状況の時に、施設長が会議で言われた、「今の自分たちの取り組みが、日本の福祉を変えることをやっているんだという自負を持って頑張してほしい」という言葉に、私は、「今は施設ありきの時だけけれど、これからの自分たちの取り組み次第で、この現実を変えることができるのかもしれない」と受けとめていました。そして、今回の、「みやぎ知的障害者施設解体宣言」が出され、その思いがより強くなりました。

人気や選挙のためだけに与えられた、薄い福祉施策ではなく、中身があり、目標がしっかりと掲げられているこの宣言を読み、初めは素直に嬉しい思いと、驚き、不安の思いがありました。しかし、誰かが始めなければ何も進まないし、何も変わらない。それが、この宣言が示していることだと思います。

サンガーデン鞍手でも、現場から変えていくノーマライゼーションの先駆者として存在することを望みます。

27 結果を焦らず、本人、家族、地域の人とたくさんコミュニケーションを取りながら

「施設解体」という言葉は衝撃的ですが、障害者の地域生活への移行は自然な流れだと思います。障害者が地域で暮らすことがあたりまえの光景になる日が早く来ることを私も望みます。ただ、保護者や家族が、「自分の子ども（家族）が本当に地域で暮らせるのか」という思いを抱いたり、地域住民が、「自分たちの街に障害者が住んで何も起きないのか」と不安を感じることもよくわかります。だから、過程や方法を大事に、しっかり考えて実行しないとうまくいかないと思います。

浅野知事も記されていましたが、初めに解体ありきではなく、障害者がスムーズに地域生活を送れるように準備できるプログラム、地域とのパイプ役、地域生活につまづいたときに戻れる場所等、考えられるあらゆるサポートを揃え、障害者本人や家族、地域の人たちとたくさんコミュニケーションを取りながら、徐々に進めていって、結果的に入所施設はいらなくなるという形が理想ではないかと思いました。時間を要する

ことだけれど、それを目指すことが私たちの役目なのではないでしょうか。

それから、サンガーデン入居者の行動障害が減少しているといろいろな文書等にありますが、いざ地域で生活するとなると、大変不安を覚えます。行動障害のある方への対応をしっかりと確立し、その成果が現れてこないと家族も不安だし、スタッフも不安を抱えたままになってしまいます。ぜひ、結果を焦らず進めていっていただきたいと思います。